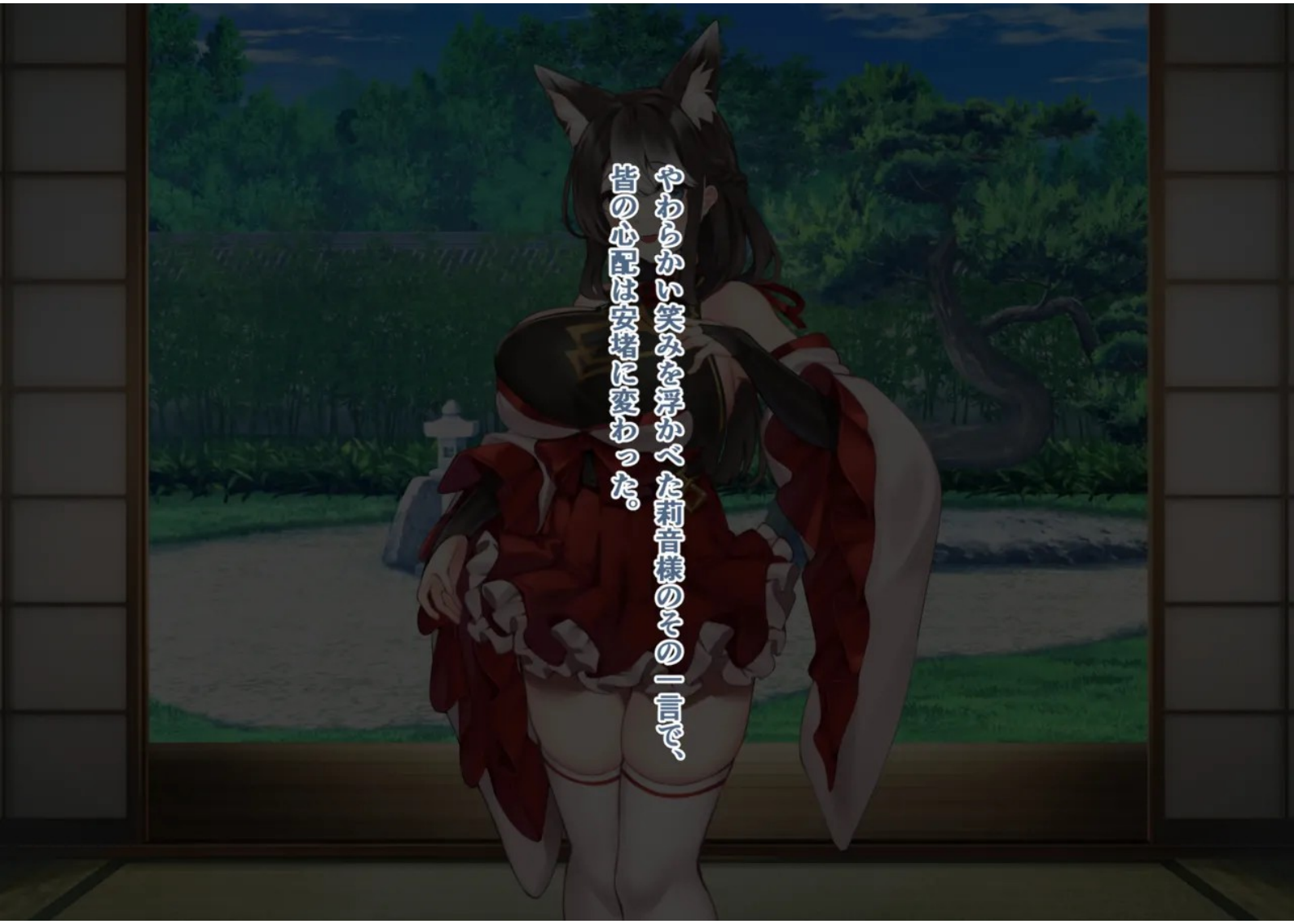
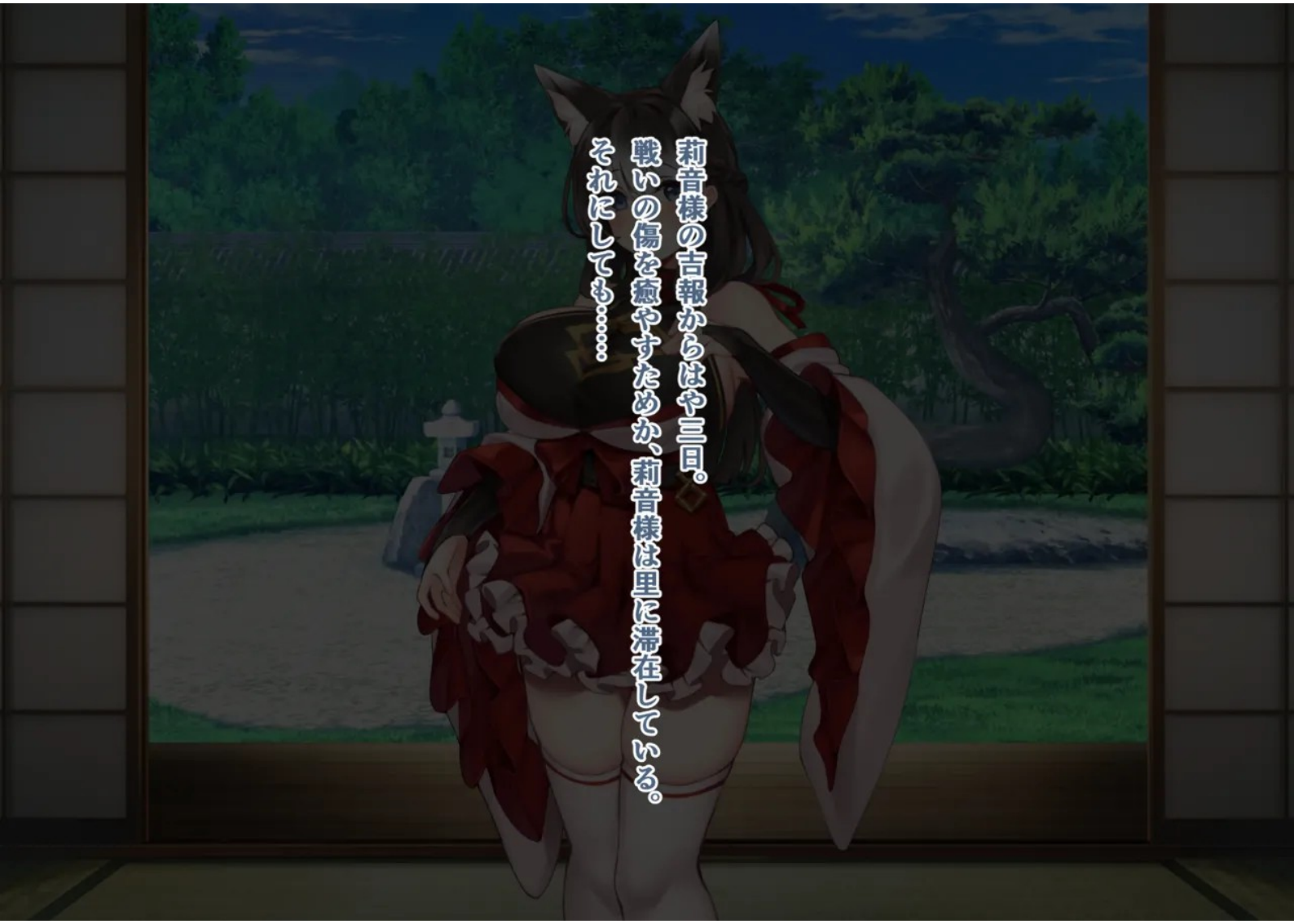
「あら、日向さん。おはようございます。今日もいい天気ですね」
「莉音様、お、おはようございます」

「ふふ、様付けはいりませんよ」
「そうもいきません。莉音様は英雄ですから」

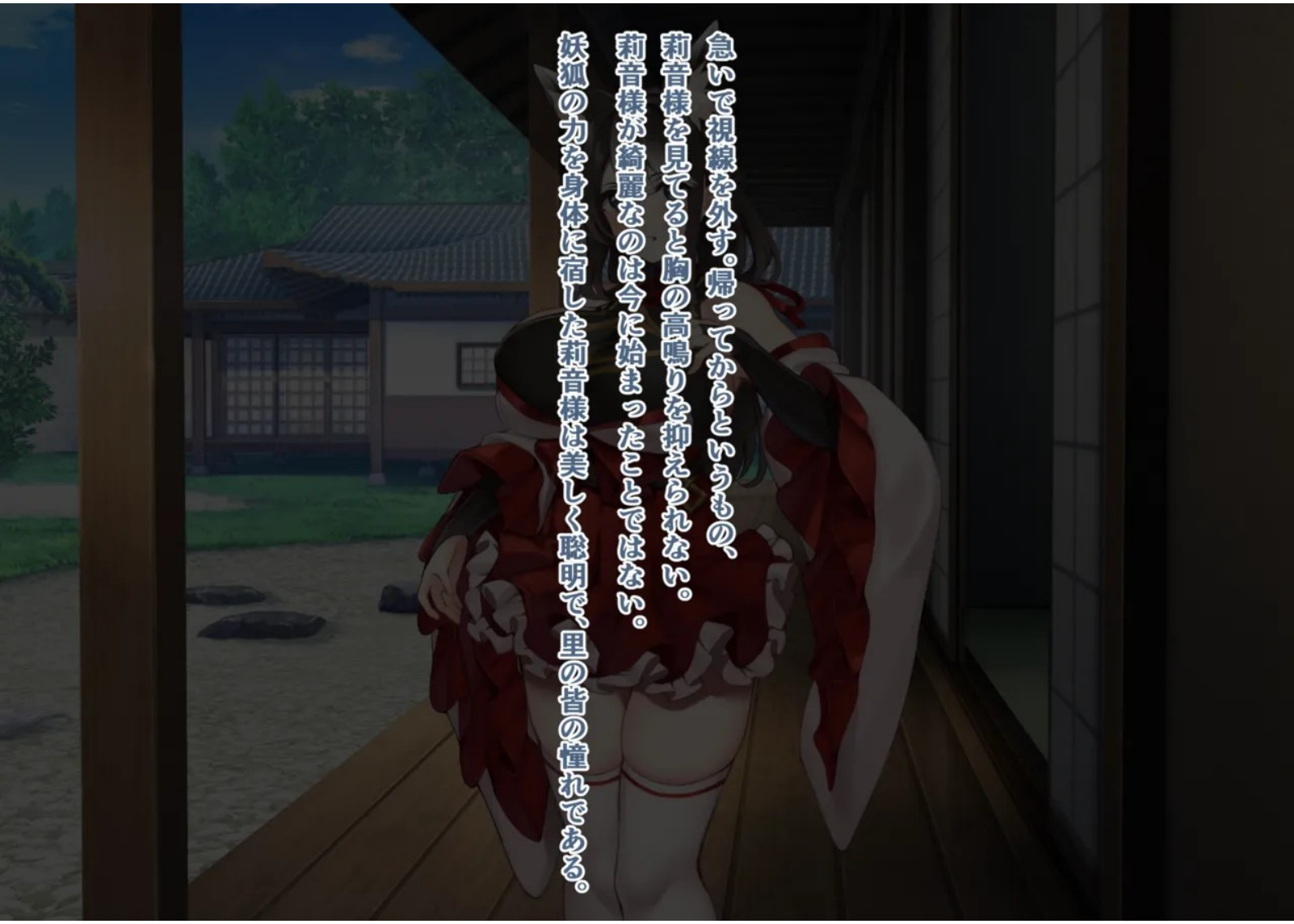
莉音様が封印されていた妖魔王の対応に向かわれたのが半年前。
連絡が途絶え、ここ退魔の里に少しずつ動揺の空気が漂い始めた頃、
莉音様は帰ってきた。

「妖魔王はもう脅威ではありません」


やわらかい笑みを浮かべた莉音様のその一言で、
皆の心配は安堵に変わった。


莉音様の吉報からはや三日。
戦いの傷を癒やすためか、莉音様は里に滞在している。
それにしても……

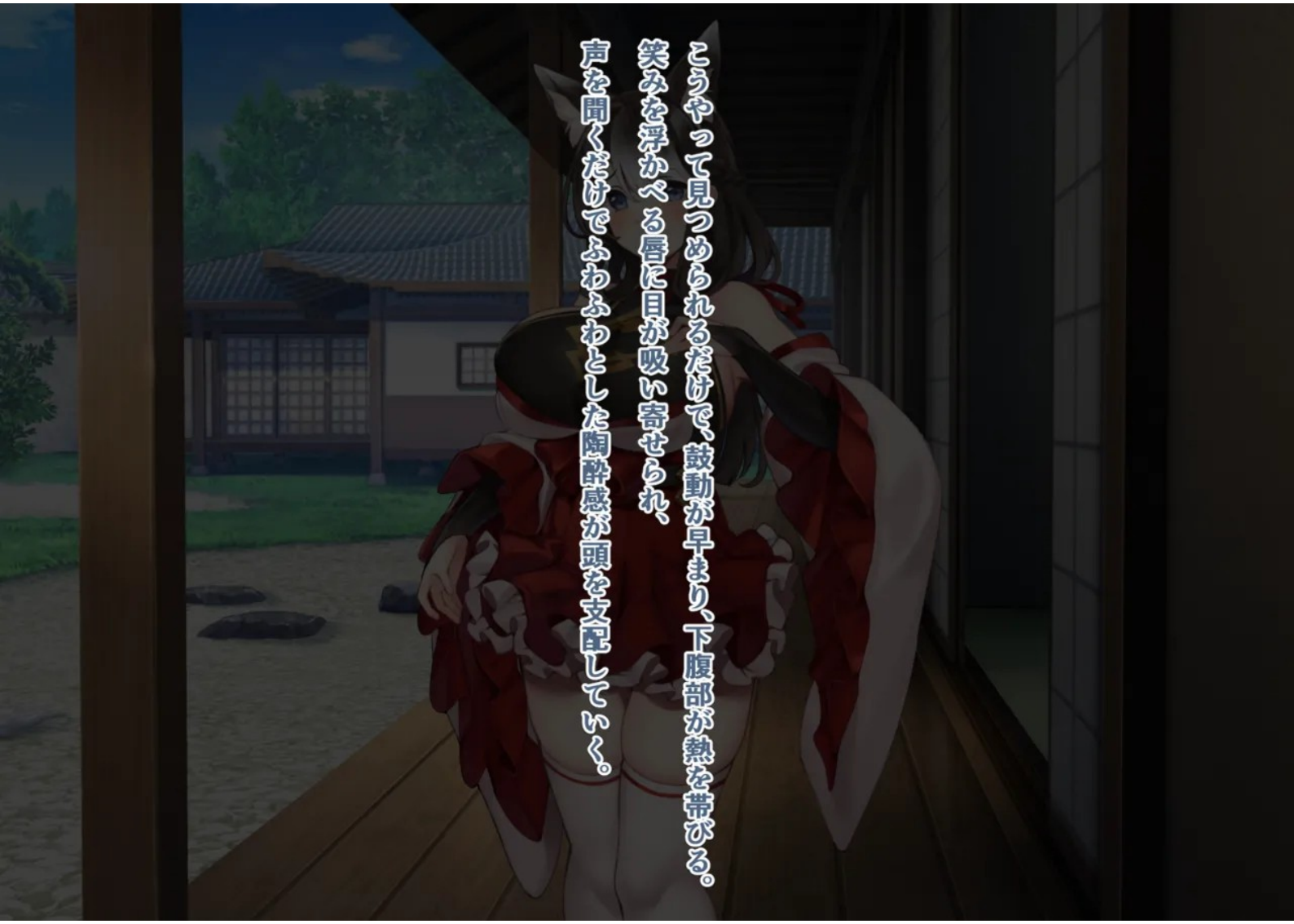
「どうかしましたか？」
「いえ、なんでも、ありません……」


急いで視線を外す。帰ってからというもの、
莉音様を見てると胸の高鳴りを抑えられない。
莉音様が綺麗なのは今に始まったことではない。
妖狐の力を身体に宿した莉音様は美しく聡明で、里の皆の憧れである。

恋心を抱いている者も少なくない。だが、それは尊敬や
畏敬の念であって、下心等では決してなかったはずだ。

「体調が優れないんですか？私に出来る事があれば言ってください。
力になりますよ」

だが、こうやって相対すると確信する。
何かが、以前とは違う。莉音様が纏う雰囲気か、気配か。

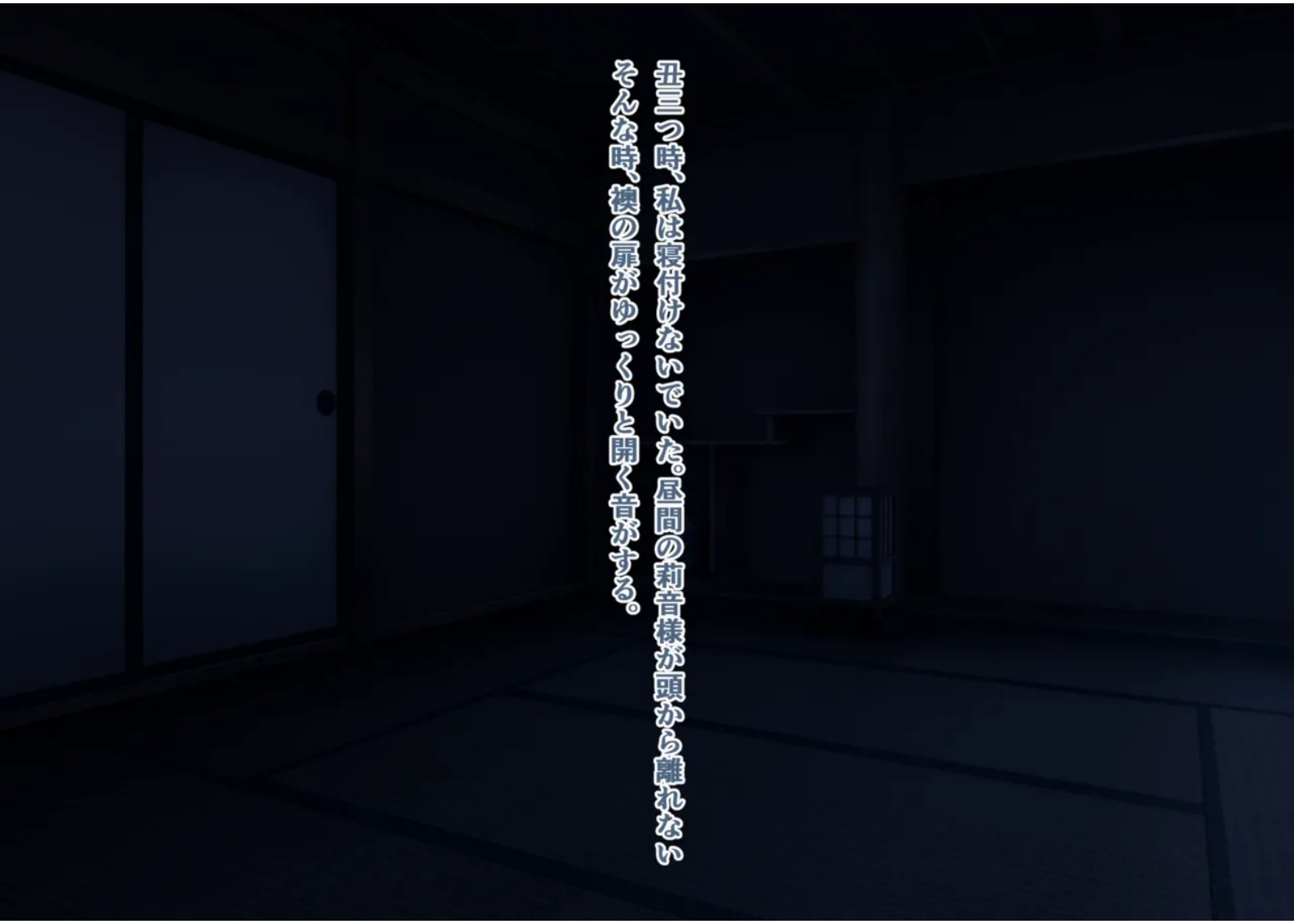

こうやって見つめられるだけで、鼓動が早まり、下腹部が熱を帯びる。
笑みを浮かべる唇に目が吸い寄せられ、
声を聞くだけでふわふわとした陶酔感が頭を支配していく。

「す、すいません！失礼します！」

私は耐えきれず、廊下を引き返す。
交代の時間には遅れ怒られるだろうが、いいだろう。
妖魔王が倒された今、結界警備などお払い箱も同然だ。
それに……

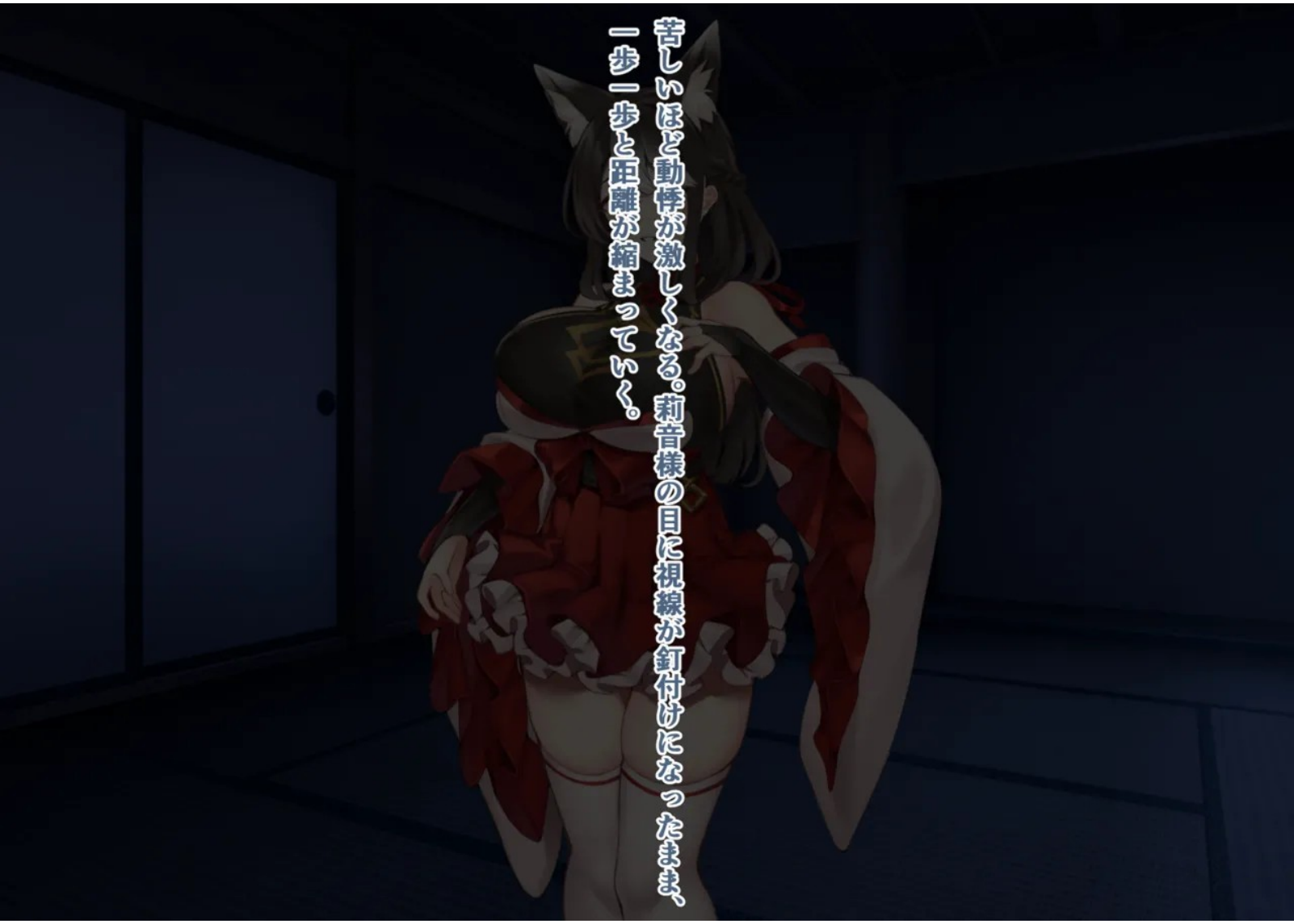
莉音様はこれほど豊満だっただろうか？

「……ペロッ♥」

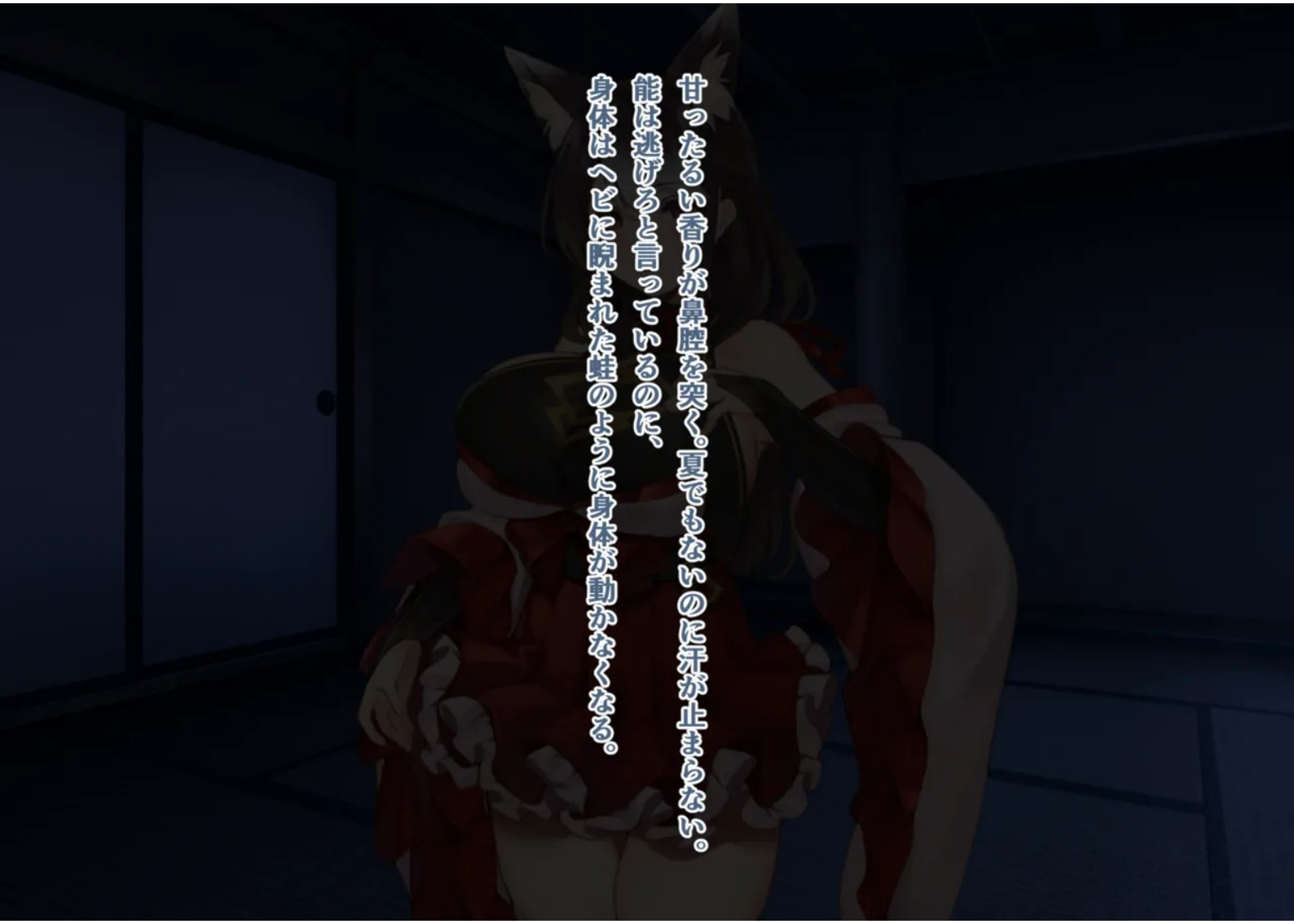

丑三つ時、私は寝付けないでいた。昼間の莉音様が頭から離れない
そんな時、襖の扉がゆっくりと開く音がする。

「こんな時間に誰だ？……莉音様!?」
「夜分遅くにすいません。昼間の様子がどうしても気になって」

「なんともありません！ こんな遅くダメですよ！ ここ男子寮ですよ」
「そんな事よりも、貴方の事が心配なのです。
苦しいのなら、私に責任がありますから」


苦しいほど動悸が激しくなる。莉音様の目に視線が釘付けになったまま、
一歩一歩と距離が縮まっていく。

「苦しくなんて……ありません」
「何を言うんですか。とても辛そうです。袴越しでもわかりますよ。々しいほど張り詰めているのが」


甘ったるい香りが鼻腔を突く。夏でもないのに汗が止まらない。
能は逃げろと言っているのに、
身体はヘビに睨まれた蛙のように身体が動かなくなる。

「一体何を……」
「わかっているでしょう？何も考えなくていいんです。
私に全て任せてください♥さぁ、横になって？」

「とっても素敵なモノをお持ちですね。
淫気に当てられて辛かったでしょう？今楽にして上げますね……んっ♥」
「淫気……？ぐ、うぅっ！？駄目です莉音様……」
ぬるぬる♡

「もしかして初めてですか？大丈夫です。
全て委ねてもらって構いませんよ。私以外では満足出来ない身体にしてあげますね……♥」

彼女の膣内はまるで生き物のようで、
意識が飛びそうになるほどの快楽に、自分の口から情けない声が出る

「ぐぅっ……はっ、あがっ」
「どうですか私の中は。気持ちいいでしょう？
あの方に造り変えて頂いた自慢の密壺なのですよ」
んっ♡
ぬっぷ～♡
んふっ♡
ぬぷぷ♡
ぬっぷ♡
ぬっぷ～♡
ぬっぷ♡
ぬっぷ♡

ぬっぷ♡
ぬっぷ♡
ぬっぷ♡
ぬっぷ♡
ぬっぷ♡
ぬっぷ♡
んっ♡
んふっ♡
「何を…言って、くひっ」
「あら、もう出そうなのですか？
どうぞ、中に出してください。遠慮する事はありませんよ。
声も抑える必要はありません。結界を張ってありますから」

ぬっぷ♡
ぬっぷ♡
ぬっぷ♡
ぬっぷ♡
ぬっぷ♡
ぬっぷ♡
んっ♡
んふっ♡
「それは……駄目ですっ、どいてください。巫女の力がっ、莉音様っ！」
「心配しないでください、既に私にはそんなモノありませんから。
だから遠慮せず、びゅーびゅーって、ふふ♡」

莉音様の発言に色々な疑問が浮かぶが、それらが口から出ることはなく、
全てが絶頂によって白く塗りつぶされていく。

「ぐぅうっ！」
「あはっ♥ おちんちんびくんびくんってなってますよ。一生懸命出せて偉いですね♥」
ぐりぐりぃ♥

「はぁ……はぁ……莉音様、さっきの発言は……巫女の力がないって？」
「言った通りです。私にもう巫女の力はありません」

「そんな……まさか……では、妖魔王との戦いで？」
「戦い？……あれは戦いとすら言えないものでした。
最初から勝敗は明らかだったんです。力の差は歴然でした」

「話が理解出来ません……だって、莉音様は妖魔王に勝って……え？」
「勝った？そんな事一言も言ってませんよ？　私は『脅威ではなくなった』と言ったのです」

「頭では分かっているのに理解を拒んでいるんですね？
ではこれを見せれば納得してもらえますか？」

「莉音……様？」
「御簾薙の名はとうに捨てたのです。今の私は妖魔レイネ。
妖魔王様に仕える傀儡奴隷です」
レイネ

「そんな……え、なんで？……は？」
「妖魔王様はもう脅威ではありません。そもそも脅威だなんておこがましい。
人間は妖魔に抵抗する事なく、平伏し、飼われるべきなのです」

「そんな……莉音様、正気に戻ってください！」
「皆さん揃いも揃って同じことを言うんですね。妖魔に取り込まれた私は正気ではないと。
『御簾薙莉音が妖魔に負けるわけがない』って」
「本当に人間というのはくだらない。かつての私を見てるようで虫唾が走ります」

全身が急速に冷えていく。かつての里の英雄が、妖魔に堕ち、
そして今自分の生殺与奪を握っているという事実が全身に恐怖を染み渡らせていく。

「あぁ、ごめんなさい。そんなに怯えないでください。
貴方を殺そうなんてつもりは毛頭ないんです。頼み事があるだけなのです。
あぁ、こんなに萎縮して……任せてください。すぐに元気にして差し上げますね♥」

「く、あ、がぁぁぁあ」
「生身の人間には強すぎましたか？人に向ける淫気は加減が難しいですね。あんっ、でも、これで元気になりましたね。私の中で元気に張り詰めてるのがわかります」
むちゅ♡

「が……や、やめ……」
「まだ理性があるんですか？結界警備というのは存外優秀なのですね。
でもやめてあげません。人間を虐めるのがこんなに楽しいなんて知りませんでした」
ぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅ♡
ぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅ♡
ぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅ♡

「逃げても無駄ですよ。むしろ加減を誤って殺してしまうかもしれません。
そうなったら私も悲しいです。後でやってもらう事もありますし」
ぐちゅ♡
ぐちゅ♡
ぐちゅ♡
ぐちゅ♡
ぐちゅ♡
ぐちゅ♡

「妖魔王様の触手ちんぽとは比べ物になりませんが、貴方のも悪くないですよ。
あら、出そうなのですか？ いいですよ。
いっぱい気持ちよくなって、理性も全部精液として出してしまいましょう？」
ぐちゅぐちゅ
ぐちゅぐちゅ
ぐちゅぐちゅ
ぐちゅぐちゅ
ぐちゅぐちゅ

「……」
「んはぁ♥ 沢山出ましたね。でも私を満足させるにはこの程度では足りません。
さぁ、夜は長いんです。もっと楽しみましょう？」
ぴゅくっ♥
ビュクッ♥
ぴゅくっ♥

ぬぬぬ♡

ぬっぷ♡
ぬっぷ♡
ぬっぷ♡
ぬっぷ♡
ぬっぷ♡
ぬっぷ♡
んっ♡
んふっ♡

ぬっぷ♡
ぬっぷ♡
ぬっぷ♡
ぬっぷ♡
ぬっぷ♡
ぬっぷ♡
んっ♡
んふっ♡

ぬっぷ♡
ぬっぷ♡
ぬっぷ♡
ぬっぷ♡
ぬっぷ♡
ぬっぷ♡
んっ♡
んふっ♡

ぐりぐりぃ♡

ブースト!!

むわぁ♡

ぐちゅぐちゅ♡
ぐちゅぐちゅ♡
ぐちゅぐちゅ♡
ぐちゅぐちゅ♡
ぐちゅぐちゅ♡

ぐちゅぐちゅ
ぐちゅぐちゅ
ぐちゅぐちゅ
ぐちゅぐちゅ
ぐちゅぐちゅ

ぐちゅぐちゅ
ぐちゅぐちゅ
ぐちゅぐちゅ
ぐちゅぐちゅ
ぐちゅぐちゅ

ピクピク♡
ぴゅくぴゅく♡